

日韓談話スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究

崔, 維卿
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494681>

出版情報 : 比較社会文化研究. 24, pp.23-44, 2008-09-30. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

日韓談話スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究

チェ 崔 ユ キョン 維 卿

0. はじめに

留学生であれば、誰でも日本語母語話者と会話をする際に、母国と日本の文化的な違いから生じる誤解で苦労した経験があるだろう。このような誤解が生じる背景のひとつとして、話し手の言語行動にのみ注目した日本語教育のあり方をあげることができる。従来の日本語教育においては、専ら話し手の言語行動に基づく教授法、教材が用いられてきた。筆者が経験した日本語学習機関での日本語の「会話」の授業においても、「話す」に焦点が当てられ、聞き手の言語行動について学ぶ機会はほとんどなかった。そこで、本研究では、聞き手の言語行動も視野に入れた新たな日本語教育の教授法、教材を開発するための第一歩として、「あいづち」という聞き手特有の言語行動に焦点をあて、それを実証的に観察、考察していきたい。

これまでも「あいづち」に関する研究は数多く行われてきたが、「あいづち」のタイミングや頻度といった量的な研究に比べ、「あいづち」の機能的な差異を対照させた研究はまだ少ない。このことから、本研究ではこれまで先行研究であまり取り上げられることのなかった機能的な観点に着目した分析を行いたい。具体的には、日韓の「あいづち」における形式的な観点からの差異と「あいづち」の出現環境による差異に焦点を当てる。このうち、出現環境の差異においては、同じ「あいづち」形式が「発話権」を持たない場合の出現環境と「発話権」を取った場合の出現環境についての比較を行い、日本語と韓国語の類似点と相違点を明らかにする。

1. 先行研究の概観

本節では、「あいづち」研究に関する先行研究を、まず、その定義の観点から、次に、実際の「あいづち」研究の動向の観点からまとめる。

1.1. 「あいづち」の定義

ここでは、先行研究において「あいづち」がどのように定義されているかを機能的観点と形式的観点から分けて見

ていく。

1.1.1. 機能的観点からの定義

これまで先行研究においては「あいづち」に関して様々な定義が試みられてきたが、その統一の見解はいまだ提出されていない。本項では、そのような現状の下、まず、機能的観点から「あいづち」がどのように定義されてきたかを見ていく。

まず、代表的な「あいづち」の機能的観点からの定義について見ていく。

水谷 (1988) は、「あいづち」を「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」、水谷(1993)は、「相手の話の途中で、句の終わりごとに入れる、いわば、合いの手のようなもの」とし、特に、「あいづち」が会話のどの部分に出現するのかを考察した。一方、メイナード(1992)は「あいづち」を「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現とし、また、メイナード (1993) は、「あいづち」の機能として、①「続けてというシグナル」、②「内容理解を示す表現」、③「話し手の判断を支持する表現」、④「相手の意見・考え方に賛成の意思表示をする表現」、⑤「感情を強く出す表現」、⑥「情報の追加・訂正・要求などをする表現」をあげた。

続く堀口 (1997) は、上記の先行研究をまとめて、「あいづちは、話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としている。また、金珍娥 (2003b) は、「あいづち」を「聞いていること、理解、同意を表す機能を持つ短い言語表現」とするのみならず、「聞いていることを示す機能を果たしているもの」はすべて「あいづち発話」と捉えた。

さて、従来の研究を概観すると、「あいづち」の機能については聞き手が話し手に送る「聞いているという信号」、「話を理解しているという信号」という点では一致しているが、その他にどのような機能を認めるか、とりわけ、相手の発話に対する「否定」の信号という点では、以下に見るように相違があるのが分かる。

「あいづち」の機能として、相手の発話に対する「否定の信号」を認めたものとしては堀口 (1988)、松田 (1988)、

ザトラウスキー(1993)をあげることができる。堀口(1988)は、あいづちの機能に、相手の発話を「聞いている」「理解している」信号の他に、相手の発話に対する「同意、否定」の信号「感情の表出」を加えて5つの機能を認めている。また、松田(1988)はこの堀口の5つの機能をさらに細分化した上で、「間をもたせる」という機能を付け加えている。さらに、ザトラウスキー(1993)は、「あいづち」を聞き手の「注目表示」を示すものとし、「継続」、「承認」、「確認」、「興味」、「感情」、「共感」、「感想」、「否定」、「終了」、「同意」の11種類に分類している。

このように、「あいづち」の機能については、特に「否定」の信号を認めるか否かによって相違がみられるが、「あいづち」の定義として導入された「否定の信号」という機能についても一致した見解があるわけではない。例えば、堀口(1988)、ザトラウスキー(1993)の「否定の信号」に対して、松田(1988)の言う「否定の信号」には「曖昧な同意」までが含まれており、その定義は曖昧だと言わざるをえない。

ところで、「あいづち」の機能的定義をめぐっては、「発話権」をどう考えるかも問題となる。そこで、次に、先行研究においてこの「あいづち」と「発話権(turn-taking)」の関係がどのように扱われてきたかを見てみる。

先行諸研究のうち、メイナード(1992)を始めとする研究は、話し手のturnに重なり、実質的な内容を含んでいない「あいづち発話」はturnとしては捉えず、話者交代や発話権の交替、発話順番を成すものとも認めていない。しかし、それが実質的な発話である場合はturnとして捉えられ、話者交代や発話権、発話順番の交替として認定されている。これに対して、金珍娥(2003a)は、全く同じ構造をなして現われている発話であるにもかかわらず、「あいづち発話」である場合はturnとして認めず、「実質的な発話」である場合はturnとして認めるということは矛盾である、と述べている。つまり、相手の発話と重複する発話をturnと認めうるのであれば、発話機能や意味内容の如何にかかわらず、実現された発話の全てはturnを構成する要素である、というわけである。

以上をまとめるならば、先行研究の多くはその構造の如何を問わず、実質的な内容を含まない「あいづち発話」はturnとして位置付けてこなかったが、金珍娥(2003a)は新たに「あいづち発話」もturnとturn-takingに関わるもの、と主張したということになる。このことから、本稿の観察では、先行研究の主張と、金珍娥(2003a)の新たな主張のどちらに妥当性があるかの検証がひとつのポイントとなった。

1.1.2. 形式的観点からの定義

次に、「あいづち」の形式的観点からの定義について見てみる。先行研究の多くは、「語彙」的形式も「非語彙」的形式も同じく「あいづち」として認めているが、「あいづち」が出現する「文」の形式の理解については相違が見られる。

まず、メイナード(1987, 1992)は、あいづち詞や頭の動き、笑いなどを「あいづち」表現とし、「文」の形式¹は認めていないが、水谷(1984)では、例文(1)の網掛け部分を「完結型」の「あいづち」、また、例文(2)の網掛け部分を「補強型」の「あいづち」としている。また、堀口(1997)と金珍娥(2003b)は、繰り返し、言い換えもあいづちとして分類し、「文」の形式も「あいづち」として認めている。

- (1) 昨日熱海のほうで大きな地震が…

ええ、ありましたね。(水谷1984: 271)

- (2) さっき、ひとつの型を作るという(ウン)お話ししましたけど(ウン)これも挨拶の型、食事の型ね(エエ)いろいろありますねえ(エエ)そういうものが崩れてきてるっていうのは、これ世界的な現象ですね(日本ダケデハナイ)……(同上)

さらに、金珍娥(2002)は、以下のように「あいづち」発話を「文法的な対立項を持つあいづち」「語彙的な対立項を持つあいづち」と「語彙的な対立項を持たないあいづち」の三つの類型に分けている。

表1 「あいづち」発話文の類型(金珍娥2002: 63)

	述部のあるあいづち 文法的な対立項を持つあいづち	述語のないあいづち 文法的な対立項を持たないあいづち	
		語彙的な対立項を持つあいづち	語彙的な対立項を持たないあいづち
敬体P	そうですね、 そうですか	はい、やはり	え、ええ、
常体N	そうだね、そうか	うん、やっぱり	へ、あ、んん、 ねえ

以上のことから、「あいづち」の形式的定義も統一が取れていないことが分かる。先行研究の記述によれば、「あいづち」には「語彙」的形式、「非語彙」的形式のみならず「文」までが含まれることがあるからである。

1 「文」の形式には、水谷(1984)の「完結型」「補強型」、堀口(1997)の「繰り返し」などがある。なお、水谷(1984)は、「言い換え」を「補強型」と呼んでいる。

1.1.3. 「あいづち」の定義についての問題点

先行研究に見られる「あいづち」の定義に関する問題点は次のようにまとめられる。

- ① 「あいづち」の機能として「否定」を認めるか否か：
「あいづち」の機能的観点からの定義を見ると、それを「否定の信号」を認めるか否かという点で意見が分かれる。また、この「否定」そのものの意味についても、「否定的な気持ちや疑いを示す」ものから「曖昧な同意を示す」ものまであり、統一が取れていない。
- ② 「あいづち」と「発話権」の関係：
先行研究の多くは、実質的内容を含まない「あいづち発話」はすべてturnとして位置付けてこなかった。一方、これに対して金珍娥(2003b)は、新たに「あいづち」は「聞いている」という聞き手側の機能のみならず、turnを獲得する「話し手側の積極的な会話参加のストラテジー」として重要な役割を果たすもの、換言すれば、turnとturn-takingに関わるもの、と主張した。つまり、「あいづち」と「発話権」の取得に関して、先行研究には意見の差異があるということである。
- ③ 「あいづち」の形式の問題：
「あいづち」の形式については、ほとんどの先行研究は「語彙」「非語彙」的な形式の他に「文」までも認めているが、中には、メイナード(1987,1993)のように「文」の形式は認めていないものもある。

1.2. 「あいづち」研究の動向：「あいづち」の頻度と出現環境をめぐって

本節では、最近の「あいづち」研究の動向を簡単に記す。近年の「あいづち」研究は主に、その頻度数を問題にしたもの、また、それがどのような環境に出現するのかを問題にするものが多い。以下では、そのような研究のうち主だったものを紹介する。

「あいづち」の頻度に関する研究では、まず、水谷(1984)が、日本語では、話し手が平均24音節言うごとに、聞き手が「あいづち」を入れるとし、兵庫県滝野方言を扱った黒崎(1987)は、総発話数に占める「あいづち文」の割合を「あいづち」の頻度として計算し、少年12.1%、壮年19.3%、老年20.7%と報告している。また、杉戸(1988)は、談話行動における「うなずき」を観察し、「あいづち」的な発話とこれと共起する身ぶりの「あいづち」(すなわち、「うなずき」との共起状況はあまり個人差がみられないが、無言でなされる身ぶりだけの「あいづち」の出現は、大きな差異を示すことを指摘した。

このように、「あいづち」の頻度に関する研究は数多くあるものの、その大部分は単純に会話全体に対する頻度を測ったものに過ぎない。

他方、「あいづち」の出現環境については、日本語を対象とした水谷(1984)は、聞き手が「あいづち」を打つのは話し手の側の音声的な弱まりが現れる時、次いで、水谷(1988)は、「て」「けど」「が」「から」の後、小宮(1986)は、終助詞「ね」とポーズの後、今石(1992)は、接続詞、終助詞の後、メイナード(1992)では、短い間(ポーズ)を置く PPU² 未付近、終助詞の「ね」「さ」「よ」「の」「か」、などで「あいづち」がよく観察される、と述べている。

1.3. 「あいづち」に関する日韓対照研究の先行研究

「あいづち」の日韓対照研究は90年代に入ってから盛んになってきた。本節では、90年代からの日韓対照研究を中心として、「あいづち」がどのように研究されてきたかを概観する。

「あいづち」の「タイミング、頻度、イメージ」に焦点を当てた研究としては、金秀芝(1992)、任・李(1995)、任炫樹(2001)をあげることができる。

まず、金秀芝(1992)は日韓のタイミングの違いについて、韓国人は相手の発話がポーズに入るとほぼ同時に「あいづち」を打つが、日本人は「あいづち」のタイミングがやや早く、相手の発話にあいづちが重なるように打たれることが多い、と指摘している。

次に、任・李(1995)は、テレビ・ラジオ番組の調査とアンケート調査を基に、目上の人に対しての「あいづち」は日本人の方が韓国人より多く、フォーマルな場面とインフォーマルな場面では、日本人は両方多くなると答えた人が多いのに対し、韓国人はフォーマルな場面より、インフォーマルな場面の方が多くなる、と答えたと言う。また、男女別による頻度の差をみると、日韓同様に、男性より女性の方が高いとし、相手と場面によるあいづちの頻度は、異性に対して、韓国人はやや少なくなるが、日本人はやや多くなる、としている。そして、同性に対しては、日韓ともにやや多くなる、と報告している。さらに、「あいづち」を打つ人に対して、韓国人はマイナス評価を、日本人はプラス評価をする、としている。

また、任炫樹(2001)は、日本語と韓国語における断り談話の初出「あいづち」マーカーとしてもっとも使用頻度が高いのは、日韓両言語とも「あ〜」「うん〜」「さ〜」などの遊び言葉のディスコース・マーカー³であるとし、その他の「あいづち」マーカーの使用頻度は全般的に韓国語よ

2 PPU: Pause-bounded Phrasal Unit の略字、ポーズによって区切られる語句という単位(メイナード1992: 96)

3 任炫樹(2001)は、「ディスコース・マーカー」を、単独で使われる場合はあまり意味を持たないが、ある発話の前置きとして使われる場合はなんらかの意味を持つ無意味語・間投詞・感動詞などと定義している(任炫樹2001, p.45)。

り日本語の方が高い、と結論づけている。

次に、「機能」に焦点を当てた先行研究を見てみる。そのようなものとしては、金秀芝 (1992)、任炫樹 (2001)、李善雅 (2001)、金珍娥 (2003a) がある。

まず、金秀芝 (1992) は、「あいづち」が両言語の談話進行の中で果たす機能について、韓国人が相手の話に「あいづち」を打たないというのは、年上、年下という意識の他に、相手が肝心な内容に触れている間は相手の話しを遮ることを控えるために「あいづち」を打たなくなるのに対し、日本人は傾聴しているというサインとして始終一貫して「あいづち」を打つ、と指摘している。

また、任炫樹 (2001) は、日本語と韓国語のいずれにおいても、実質的な断り発話に入る前に「あいづち」マーカが発せられる傾向があるとし、「あいづち」マーカは、間を設けることによって会話の流れをゆったりさせ、断り談話をやわらげる働きをすとし、さらに、直ちに断りを発する場合のぶっきら棒なものの言い方を回避させると同時に、断りを予告するシグナルとしても機能する、とも指摘している。

李善雅 (2001) は、議論の場にみられる日韓の「同意」を示す「あいづち」について、日本人は会話に参加する積極的な態度を示すとともに、話し手が意見を述べやすい雰囲気を作るために「あいづち」を頻繁に打つのにに対し、韓国人は、逆に、議論の場において相手の意見に必要以上に同意を示すと優柔不断な人間であるというネガティブな印象を与えるため「あいづち」の回数が少なくなる、と述べている。

最後に、金珍娥 (2003a) は、韓国語と日本語における「あいづち」発話の機能を turn の存在様式によって分けて、「あいづち」発話の使用を実際の談話を用いて検討した。その結果、「相手の turn と共存しているあいづち発話」は日本語に多いが、「相手の turn と独立しているあいづち発話」は韓国語と日本語が同等の比率を示しており、韓国語のあいづち発話も日本語に劣らぬほど、談話のダイナミズムを支える、線的かつ動的な機能を果たしている、と結論づけている。

以上のことから分かるように、日韓対照研究は、「あいづち」の頻度やタイミングなどに対する研究に比べ、「あいづち」の「機能」的差異を対照させた研究はまだ少ない。したがって、本稿は、日韓の「あいづち」の対照研究の中でも、これまであまり対象とならなかった機能的な観点からの対照を目指す。

1.4. 先行研究のまとめ

以上、本稿が対象とする「あいづち」研究の主たる先行研究を概観した。その結果、「あいづち」については、その

定義においても、また、その形式においても統一的理解がまだ提出されていないこと、また、「あいづち」に関する日韓対照研究については、頻度やタイミングといった量的研究が主で、その機能的差異に焦点をあてた研究は少ないことが分かった。

2. 観察

本節では、上で述べた先行研究の問題点を踏まえ、特に、日韓の「あいづち」の機能的差異を明らかにするために、以下に述べるような観察を実施する。

2.1. 観察対象：データとして抽出した「あいづち」について

日韓の「あいづち」を対照するにあたっては、何を「あいづち」とするかが問題となる。そこで、本節では、本稿の考える「あいづち」について述べる。

2.1.1. 機能について

先に見たように、先行研究では「あいづち」の機能に関して、「聞いている」「理解している」ことを示す信号という点では一致しているが、「否定」の信号を認めるか否かによって相違がみられた。そこで、本稿は、取り合えず、メイナード (1992) に従い、「あいづち」発話とは「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語的なものは除く）」として定義する。そして、「あいづち」の機能の定義としては、「話し手の話を聞いていることを示す」という「あいづち」の機能の中でも、「内容の理解」「同意を表す短い表現」「感情の表出」を示すものを「あいづち」とする。つまり、話し手の話を「聞いていること」を示していても、それが話し手の発話に対する聞き手の「否定」を表していたり、聞き手の確認等のために上昇イントネーションで発話されたものは「あいづち」とみなさない。

2.1.2. 「あいづち」と「発話権」の関係について

「あいづち」を観察するにあたっては、「発話権」との関係も問題になる。そこで、本稿では、先行研究の一般的見方を踏まえ、「あいづち」は、取り合えず、「発話権」を取らないものとして観察することにした。そして、話し手が発話権を取る直前、発話を始めようとする発話機能を持っている発話であるものは「言いよどみ」や「フィラー」として捉え、本研究においては「あいづち」としないことにした。また、なんらかの実質的な内容を表す形式を含み、判断、説明、質問、回答などの発話 (杉戸：1987) も本研究においては除外した。

2.1.3. 形式について

本稿は、「あいづち」の形式として「話し手の話を聞いていることを示す」ものの中で、「語彙」的、「非語彙」的形式を含めたものを「あいづち」形式とする。しかし、「相手の話を聞いていることを示す」ものの中でも、水谷(1984)が言う「完結型」と「補強型」、また、「繰り返す」表現のような「文」の形式は除外した。

2.2. 観察方法

2.2.1. 資料体

本稿が観察を実施するにあたり、その資料体としたのは、以下に示す司会者2名とゲスト1名という同じ形態の日韓インタビュー番組である。

1. 日本語：スタジオパークからこんにちは (NHK、2007年4月～2007年9月放映)

JF：「武内陶子(司会者：女・42歳)」

JM：「遠藤亮(司会者：男・34歳)」

2. 韓国語：「아침마당(atimumadan)」(KBS、2005年9月～2007年8月放映)

KF：「이금희(leegumhi)(司会者：女・40歳)」

KM：「손범수(sonbomsu)(司会者：男・42歳)」

これらの番組はどちらも、女性アナウンサーと男性アナウンサーがペアで司会者になりゲストから話を聞くというものである。これらの番組を資料体として選択したのは、テレビのインタビュー番組という性質から日常会話に近いデータが取れるだろうと推察したからである。分析に用いた会話として、日韓とも番組の中で9本ずつ、総18本を選択したが、20代～60代の世代別に男女それぞれ一本ずつ5分総90分となった。

両番組とも、主な話し手はゲストであり、司会者二人は聞き手としての役割を果たしている。観察にあたっては、録音・録画した当該番組を、ゲストの性・年齢・職業別に分類し、インタビューの最初の5分程度の会話を文字化した。

2.2.2. 観察の対象となった者

2.2.2.1. 日本人

本観察で対象となった者の詳細をここで示す。まず、日本語番組については、司会者は男女2名で、年齢は男性34歳、女性42歳である。ゲストは表2.1の示すように、年齢は20代から60代まで、職業は社会人の中でも、芸能人、学者、などであった。このような対象者を世代別に30代の男性を除外した男女1名⁴ずつ、総9名を調査した。

4 今回のデータ収集では、日韓の20代の男性のデータが取れなかったため、20代の男性についての分析は除外する。

表2.1 日本人ゲストのデータ

ゲスト略語	性別	年齢	職業
JGF1	女	23	俳優
JGM2	男	31	俳優
JGF3	女	36	俳優
JGM4	男	47	俳優
JGF5	女	47	俳優
JGM6	男	54	言語学者、評論家
JGF7	女	58	歌手、アーティスト
JGM8	男	62	小説家、詩人、作家
JGF9	女	61	歌手・アーティスト

2.2.2.2. 韓国人

韓国語の番組については、司会者は男女1人ずつ2名で、年齢は男性42歳、女性40歳であった。また、ゲストについては、表2.2が示すように、年齢は日本人と同様に20代から60代で、職業も同様に、会社員、芸能人、弁護士と幅広かった。これらの対象者を30代の男性を除外した世代別に男女1名ずつ、総9名を観察した。

以上、本観察において対象となった者を示したが、予め断っておかねばならないことがある。それは、今回の観察の当初の予定では20代から60代のすべての年代の男女において、日韓の「あいづち」の実態を比較・対照するつもりであったが、番組の関係でどうしても20代男性のデータが収集できなかったという点である。

表2.2 韓国人ゲストのデータ

ゲスト略語	性別	年齢	職業
KGF1	女	22	世界女子ボクシング チャンピオン
KGM2	男	37	ミュージカル演出家、芸能人
KGF3	女	35	俳優
KGM4	男	43	俳優
KGF5	女	41	ベンチャー企業社長
KGM6	男	52	医学博士、美容師
KGF7	女	50	大学教授
KGM8	男	62	アーティスト・俳優
KGF9	女	62	韓国家庭法律相談所長

2.2.3. 文字化について

録音・録画したデータを文字化するにあたっては、金珍娥(2003b)を参考にし、時間の流れと共に会話の流れが見

えるよう、「複線の文字化システム」を用いた。金珍娥(2003 b: 63)によると、「時間軸に沿って横へ直線に繰り広げる文字列の複線的な構造化は、2人の会話だけではなく、3人以上の話手による談話においても、発話の重複や割り込みなどの位置、turn-taking が行われる位置などを精密に

表記することができる」という利点がある。とりわけ、本研究がこの「複線の文字化システム」を用いた理由の一つは、上記したように、データとした会話に関わる話し手が3人であったという点にある。以下、この「複線の文字化システム」の具体例を示す。

(3)

JF	こうゆう写真がドット… ⁴
JM	着物部屋ですか? ¹ ものすごくきれいにまた、整理されているんですね。 ³
JGM	はい ²

(日本語資料4からの抜粋)

2.3. 観察結果

2.3.1. 日本語番組における「あいづち」の頻度と割合

まず、日本語の番組における「あいづち」の実態を、そ

の頻度という観点から分析した。表2.3は各インタビューにおける日本人男女司会者およびゲストの間における各人の「あいづち」の頻度とその割合である。

表2.3 日本語番組における「あいづち」の頻度と割合

インタビュー番号	発話者	世代	性別	「あいづち」の回数	当該インタビューにおける各人の「あいづち」の割合 (%)	あいづちの総数に対する割合 (%)
資料1	JF	40代	女	27	65.9%	8.1%
	JM	30代	男	2	4.9%	0.6%
	JGF1	20代	女	12	29.3%	3.6%
小計				41	100.0%	12.3%
資料2	JF	40代	女	23	76.7%	6.9%
	JM	30代	男	1	3.3%	0.3%
	JGM2	30代	男	6	20.0%	1.8%
小計				30	100.0%	9.0%
資料3	JF	40代	女	14	66.7%	4.2%
	JM	30代	男	2	9.5%	0.6%
	JGF3	30代	女	5	23.8%	1.5%
小計				21	100.0%	6.3%
資料4	JF	40代	女	25	58.1%	7.5%
	JM	30代	男	7	16.3%	2.1%
	JGM4	40代	男	11	25.6%	3.3%
小計				43	100.0%	12.9%
資料5	JF	40代	女	22	51.2%	6.6%
	JM	30代	男	5	11.6%	1.5%
	JGF5	40代	女	16	37.2%	4.8%
小計				43	100.0%	12.9%
資料6	JF	40代	女	21	70.0%	6.3%
	JM	30代	男	6	20.0%	1.8%
	JGM6	50代	男	3	10.0%	0.9%
小計				30	100.0%	9.0%

資料 7	JF	40代	女	24	64.9%	7.2%
	JM	30代	男	8	21.6%	2.4%
	JGF7	50代	女	5	13.5%	1.5%
小計				37	100.0%	11.1%
資料 8	JF	40代	女	29	64.4%	8.7%
	JM	30代	男	9	20.0%	2.7%
	JGM8	60代	男	7	15.6%	2.1%
小計				45	100.0%	13.5%
資料 9	JF	40代	女	27	62.8%	8.1%
	JM	30代	男	5	11.6%	1.5%
	JGF9	60代	女	11	25.6%	3.3%
小計				43	100.0%	12.9%
合計	JF			212		63.7%
	JM			45		13.5%
	JGF			49		14.7%
	JGM			27		8.1%
総合計				333		100.0%

表 2. 3 からまず分かることは、資料 1 から資料 9 のインタビューのすべてにおいて女性司会者の「あいづち」の数が男性司会者の数を上回っていたことである。これは「あいづち」総数に対する女性司会者の割合においても確認された。女性司会者が打った「あいづち」の平均の割合は 63.7% で、全インタビューにおいて打たれた「あいづち」総数

の約 6 割を占めている。もし「あいづち」の頻度がインタビュー番組における関与の度合いと相関すると考えるならば、当該の日本語インタビュー番組で番組進行の中心的存在であったのは女性司会者の方だったということになる。また、「あいづち」の割合については、表 2. 4 が示すように、ゲストの男女においても差が見られた。

表 2. 4 「あいづち」総数に対する日本人男女ゲストの「あいづち」の頻度と割合

男性	世代	回数	割合(%)	女性	世代	回数	割合(%)
JGM2	30代	6	1.8%	JGF3	30代	5	1.5%
JGM4	40代	11	3.3%	JGF5	40代	16	4.8%
JGM6	50代	3	0.9%	JGF7	50代	5	1.5%
JGM8	60代	7	2.1%	JGF9	60代	11	3.3%
合計		27	8.1%	合計		37	11.1%

30代においては、男性の方がやや高い割合を示しているが、その他の世代においては、男性のゲストより女性のゲストの打つ「あいづち」の頻度数が高く、男女の全体の頻度数を比べてみても、女性ゲストの方がより頻繁に「あいづち」を打っている。これは先に見た日本人男女司会者における「あいづち」の頻度と同じ傾向と言える。以上の結果から、本研究の対象となった当該日本人については、男

性より、女性の方が「あいづち」を多く打ったということになる。

2.3.2. 韓国番組における「あいづち」の頻度と割合

日本語番組の場合と同じく、韓国語番組の「あいづち」の実態を頻度という観点から分析した結果は表 2. 5 のようになる。

表 2.5 韓国語番組における「あいづち」の頻度と割合

インタビュー番号	発話者	世代	性別	「あいづち」の回数	当該インタビューにおける各人の「あいづち」の割合 (%)	あいづちの総数に対する割合 (%)
資料 1	KF	40代	女	12	48%	3.6%
	KM	40代	男	13	52%	3.9%
	KGF1	20代	女		0%	0.0%
小計				25	100.0%	7.6%
資料 2	KF	40代	女	13	29.5%	3.9%
	KM	40代	男	27	61.4%	8.2%
	KGM2	30代	男	4	9.1%	1.2%
小計				44	100.0%	13.3%
資料 3	KF	40代	女	26	72.2%	7.9%
	KM	40代	男	3	8.3%	0.9%
	KGF3	30代	女	7	19.4%	2.1%
小計				36	100.0%	10.9%
資料 4	KF	40代	女	22	32.8%	6.6%
	KM	40代	男	35	52.2%	10.6%
	KGM4	40代	男	10	14.9%	3.0%
小計				67	100.0	20.2%
資料 5	KF	40代	女	9	32.1%	2.7%
	KM	40代	男	16	57.1%	4.8%
	KGF5	40代	女	3	10.7%	0.9%
小計				28	100.0%	8.5%
資料 6	KF	40代	女	18	34.6%	5.4%
	KM	40代	男	11	21.2%	3.3%
	KGM6	50代	男	23	44.2%	6.9%
小計				52	100.0%	15.7%
資料 7	KF	40代	女	9	34.6%	2.7%
	KM	40代	男	16	61.5%	4.8%
	KGF7	50代	女	1	3.8%	0.3%
小計				26	100.0%	7.9%
資料 8	KF	40代	女	13	38.2%	3.9%
	KM	40代	男	18	52.9%	5.4%
	KGM8	60代	男	3	8.8%	0.9%
小計				34	100.0%	10.3%
資料 9	KF	40代	女	3	15.8%	0.9%
	KM	40代	男	15	78.9%	4.5%
	KGF9	60代	女	1	5.3%	0.3%
小計				19	100.0%	5.7%
合計	KF			125		37.8%
	KM			154		46.5%
	KGF			12		3.6%
	KGM			40		12.1%
総合計				331		100.0%

韓国語番組における男女司会者の「あいづち」の頻度に関しては、資料3と資料6においては、女性の司会者の頻度が男性司会者のそれをやや上回ったが、その他の資料においては男性司会者の「あいづち」頻度の方が女性司会者のそれより高かった。また、「あいづち」総数に対する男性司会者の頻度も同様で、男性司会者が打った「あいづち」

は「あいづち」全体の46.5%、約5割を占めていた。この結果に従えば、韓国のインタビュー番組においては男性司会者がより積極的に番組進行に関与していたと思われる。「あいづち」の頻度差は、表2.6が示すように、男女ゲストの間にも見られた。

表2.6 「あいづち」総数に対する韓国人男女ゲストの「あいづち」の頻度と割合

男性	世代	回数	割合(%)	女性	世代	回数	割合(%)
KGM2	30代	4	1.2%	KGF3	30代	7	2.1%
KGM4	40代	10	3.0%	KGF5	40代	3	0.9%
KGM6	50代	23	6.9%	KGF7	50代	1	0.3%
KGM8	60代	3	0.9%	KGF9	60代	1	0.3%
合計		40	12.1%	合計		12	3.6%

「あいづち」総数331に対する男女ゲスト全体の割合を比較してみると、30代は例外的に男性ゲストより女性ゲストの頻度の方が高かったが、全体的には、男性ゲストの方がより頻繁に「あいづち」を打っていた。これは男女司会者の間に見られた「あいづち」の頻度差と同じである。この結果から、今回の韓国語インタビュー番組では、女性より男性の方が「あいづち」を多く打ったということになる。ところで、資料3と資料6では男性司会者の「あいづち」の割合が他の資料に比べ極端に低かったが、それにはインタビューの話題が関係していたと思われる。インタビュー

の録画を見ると、インタビューの話題が自分にとって参加しやすいとき、韓国の男性司会者は「あいづち」よりturnを取り会話に積極的に参加することが多く、その分「あいづち」を打つ回数が減少したからである。

2.3.3. 「あいづち」と年代差

本項では、日本語と韓国語の「あいづち」をその年代差という観点から比較対照する。表2.7と表2.8は、日本人男女司会者と韓国人男女司会者のゲストの年代別「あいづち」の頻度とその割合を示したものである。

表2.7 日本人男女司会者のゲストの年代別「あいづち」の頻度と割合

ゲストの年代	司会者	「あいづち」回数	割合(%) ⁵	ゲストの年代	司会者	「あいづち」回数	割合(%)
30	JF	37	20%	30	JM	3	7%
40	JF	47	25.4%	40	JM	12	27.9%
50	JF	45	24.3%	50	JM	14	32.6%
60	JF	56	30.3%	60	JM	14	32.6%
合計		185	100%	合計		43	100%

表2.8 韓国人男女司会者のゲストの年代別「あいづち」の頻度と割合

ゲストの年代	司会者	「あいづち」回数	割合(%)	ゲストの年代	司会者	「あいづち」回数	割合(%)
30	KF	39	34.5%	30	KM	30	21.3%
40	KF	31	27.4%	40	KM	51	36.2%
50	KF	27	23.9%	50	KM	27	19.1%
60	KF	16	14.2%	60	KM	33	23.4%
合計		113	100%	合計		141	100%

5 「割合」は、当該司会者の「あいづち」総数のうち、当該ゲストの発話に対して打った「あいづち」の数の割合を示したものである。

日本人男女司会者の30代ゲストに対する「あいづち」の頻度とその割合を60代ゲストに対するそれと比較してみると、30代のゲストに対してよりも60代のゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打っていたことが分かる。また、日本人男女司会者の自分たちと同年代（女40代、男30代）のゲストに対する「あいづち」の頻度とその割合を自分たちよりもかなり年上の60代のゲストに対するそれと比較してみると、ここでも同様に、年上の60代のゲストに対して頻繁に「あいづち」を打っていたことが分かった。

これに対して、韓国人男女司会者の30代ゲストに対する「あいづち」の頻度とその割合を60代ゲストに対するそれと比較してみると、女性司会者は自分より若い30代ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打ち、男性司会者は自分より年上のゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打っていたことが分かる。次に、男女司会者の自分たちと同年

代の40代ゲストに対する「あいづち」の頻度とその割合を自分たちよりかなり年上の60代ゲストに対するそれと比較してみると、韓国人男女司会者においては、年上のゲストより同年代に対してより頻繁に「あいづち」を打っていたことが明らかになった。

以上の結果から、本研究の観察では、日本人司会者は男女とも自分より年上の年代に対してより頻繁に「あいづち」を打つが、韓国人司会者は、逆に、全体的には同年代よりは年下に対してより頻繁に「あいづち」を打つ、ということになった。

2.3.4. 「あいづち」と性差

本項では、日韓男女司会者が各年代の男女別ゲストに対して打つ「あいづち」の頻度とその割合を比較・対照した。その結果は表2.9および表2.10のようになる。

表2.9 日韓女性司会者の各年代男女別ゲストに対する「あいづち」の頻度と割合

日 本 人						韓 国 人					
ゲストの年代と性	回数	割合 ⁶	ゲストの年代と性	回数	割合	ゲストの年代と性	回数	割合	ゲストの年代と性	回数	割合
30(男)	23/185	12.4%	30(女)	14/185	7.6%	30(男)	13/113	11.5%	30(女)	26/113	23.0%
40(男)	25/185	13.5%	40(女)	22/185	11.9%	40(男)	22/113	19.5%	40(女)	9/113	8.0%
50(男)	21/185	11.4%	50(女)	24/185	13.0%	50(男)	18/113	15.9%	50(女)	9/113	8.0%
60(男)	29/185	15.7%	60(女)	27/185	14.6%	60(男)	13/113	11.5%	60(女)	3/113	2.7%
合計	98/185	53.0%	合計	87/185	47.0%	合計	66/113	58.4%	合計	47/113	41.6%
平均		13.2%	平均		11.8%	平均		14.6%	平均		10.4%

表2.10 日韓男性司会者の各年代男女別ゲストに対する「あいづち」の頻度と割合

日 本 人						韓 国 人					
ゲストの年代と性	回数	割合	ゲストの年代と性	回数	割合	ゲストの年代と性	回数	割合	ゲストの年代と性	回数	割合
30(男)	1/43	2.3%	30(女)	2/43	4.7%	30(男)	27/141	19.1%	30(女)	3/141	2.1%
40(男)	7/43	16.3%	40(女)	5/43	11.6%	40(男)	35/141	24.8%	40(女)	16/141	11.3%
50(男)	6/43	14.0%	50(女)	8/43	18.6%	50(男)	11/141	7.8%	50(女)	16/141	11.3%
60(男)	9/43	20.9%	60(女)	5/43	11.6%	60(男)	18/141	12.8%	60(女)	15/141	10.6%
合計	23/43	53.5%	合計	20/43	46.5%	合計	91/141	64.5%	合計	50/141	35.5%
平均		10.7%	平均		9.3%	平均		12.9%	平均		7.1%

日本人女性司会者と韓国人女性司会者ともに、女性ゲストより男性ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打ち、日本人男性司会者と韓国人男性司会者ともに、女性ゲストより男性ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打って

いた。つまり、日本人司会者、韓国人司会者ともに、女性司会者は異性ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打ち、男性司会者は同性ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打ったということである。

6 「割合」は、当該司会者の「あいづち」総数のうち当該ゲストの発話に対して打った「あいづち」の数の割合を示したものである。

2.3.5. 「あいづち」と職種

今回の観察では、相手の職業別「あいづち」の頻度とその割合の日韓対照は、残念ながら不完全なものとなった。その理由は、日本側のゲストのほとんどと韓国側ゲストの約半分が芸能人だったことにある。つまり、比較対照するに足る多様な職業の発話者データが集まらなかったという

ことなのである。しかしながら、韓国側のデータにはある程度ゲストの職種による差が見られた。それは、ゲストが芸能人の場合と芸能人以外の場合で、司会者の「あいづち」の頻度と割合に差が見られたのである。表2. 11を参照されたい。

表2.11 韓国人司会者のゲストの職業別「あいづち」の頻度と割合

インタビュー番号(資料)	発話者	あいづちの合計	あいづちの回数	あいづちの総数に対する割合 (%)
資料1 (ボクシングチャンピオン)	KF	25	12	3.6%
	KM		13	3.9%
資料2 (ミュージカル演出家、芸能人)	KF	44	13	3.9%
	KM		27	8.2%
資料3 (俳優)	KF	36	26	7.9%
	KM		3	0.9%
資料4 (俳優)	KF	67	22	6.6%
	KM		35	10.6%
資料5 (ベンチャー企業社長)	KF	28	9	2.7%
	KM		16	4.8%
資料6 (医学博士、美容師)	KF	52	18	5.4%
	KM		11	3.3%
資料7 (大学教授)	KF	26	9	2.7%
	KM		16	4.8%
資料8 (アーティスト・俳優)	KF	34	13	3.9%
	KM		18	5.4%
資料9 (韓国家庭法律相談所長)	KF	19	3	0.9%
	KM		15	4.5%
合計		331	279	84.3%
平均			31	

表2. 11によれば、韓国人男女司会者の総「あいづち」の平均値は31回である。今、男女司会者の総「あいづち」数がこの平均値より低いものを探すと、それは資料1、5、7、9となるが、これらの資料にはゲストがみな非芸能人という共通点がある。つまり、韓国人男女司会者は、非芸能人ゲストに対してより芸能人ゲストに対してより頻繁に「あいづち」を打ったのである。このような現象が起こった理由の一つとして考えられることとして、芸能人のゲストは司会者と同じ業界にいることから、彼らにとって身近な存在である可能性が高く、非芸能人のゲストは一般の社会人であり、司会者にとっては初対面の相手である可能性が強いということがある。つまり、この現象には相手との

親疎が関係していると考えられるのである。

「あいづち」と職種という観点から見てもう一つ興味深かったのは、資料1のゲスト KGF が1回の「あいづち」も打たなかったことである。この資料1では、ゲストが苦勞の多かった自分の半生を語っているのであるが、韓国語ではこのように相手が本人にとって意味深く真摯な話をするときには「あいづち」を打たず、その代わりに相手の話を遮ることのない「うなずき」を多用する傾向があるように思われる。

2.4. 日韓の「あいづち」の類似点と相違点 : 形式的及び出現環境という観点から

2.4.1. 形式的観点からの差異

金珍娥 (2002) に基づき、日韓双方において出現した「あ

いづち」の類型を、(1)文法的な対立項を持つ「あいづち」、(2)語彙的な対立項を持つ「あいづち」、(3)対立項を持たない「あいづち」の三つの類型に分けると表2.12のようになる。

表 2.12 日韓の「あいづち」形式の類型

あいづちの類型	日本語形式	回数	割合 (%)	韓国語形式 ⁷	回数	割合 (%)
(1)文法的な対立項を持つあいづち	そうですね	12	3.6%	そうですね	8	2.4%
	そうですか	10	3.0%	そうですね	5	1.5%
	そうですよね	2	0.6%	そうでしょう	1	0.3%
	そうですか～	2	0.6%	そうね	1	0.3%
	そうですね～	1	0.3%			
	ですよ	1	0.3%			
	ですね	1	0.3%			
	そうか	1	0.3%			
	そうね	1	0.3%			
小 計	小計	31	9.3%		15	4.5%
(2)語彙的な対立項を持つあいづち	はい	118	35.4%	はい	168	50.8%
	う～ん	16	4.8%	うん～	17	5.1%
	うん	15	4.5%	はいはい	16	4.8%
	なるほど	4	1.2%	うん	13	3.9%
	そう	3	0.9%	はい～	11	3.3%
	ほんとうに	2	0.6%	ほんとうに	1	0.3%
	なるほどね	2	0.6%			
	そうそう	2	0.6%			
	ほんとう	1	0.3%			
小 計	小計	163	48.9%		226	68.3%
(3)語彙的対立項を持たないあいづち	あ～	45	13.5%	あ～	50	14.8%
	え	24	7.2%	あ	16	4.8%
	あ	10	3.0%	お～	9	2.7%
	え～	10	3.0%	お～	3	0.9%
	え～?	9	2.7%	ああ	2	0.6%
	お～	8	2.4%	あら	2	0.6%
	ね	6	1.8%	おう～	2	0.6%
	はあ～	5	1.5%	おっ	2	0.6%
	うわ～	3	0.9%	はああ	1	0.3%
	ああ	2	0.6%	うわ～	1	0.3%
	あっ	2	0.6%	いや～	1	0.3%
	あら	2	0.6%	ありゃ～	1	0.3%

7 ここでは韓国語を日本語に訳したものをあげている。

ええ	2	0.6%		
えっ?	2	0.6%		
わあ～	2	0.6%		
あ～?	1	0.3%		
あら?	1	0.3%		
ね～	1	0.3%		
へえ～	1	0.3%		
へえ?	1	0.3%		
ほお	1	0.3%		
や～	1	0.3%		
小 計		139	41.7%	90 27.2%
合 計		333		331

全体の「あいづち」総数においては、日本語は333回、韓国語は331回で大きな差は見られなかった。また、「あいづち」の種類を項目別に観察した結果、日韓両方とも、(2)語彙的な対立項を持つ「あいづち」が一番出現頻度が高く、次に(3)対立項を持たない「あいづち」、(1)文法的な対立項を

持つ「あいづち」という順になり、日韓の「あいづち」の種類別頻度数とその割合には差がなかった。次に、「あいづち」の種類をさらに詳しくみていくため、「あいづち」の表現形式をいくつかの種類に分類した。表2.13、表2.14を参照されたい。

表2.13 日本語の「あいづち」の種類別頻度とその割合

出現順位	種類	形式	出現回数	割合(%)
1	はい系	はい	117	35.1%
2	あ系	あ、あ～、あ～?、ああ、あっ、あら、あら?	63	18.9%
3	え系	え、え～、え～?、ええ、えっ?	47	14.1%
4	そう系	そうですね、そうですか、そうですよね、そう、そうですか～、そうそう、そうですね～、そうか、そうね	35	10.5%
5	うん系	う～ん、うん	31	9.3%
6	お系	お～	8	2.4%
7	ね系	ね、ね～	7	2.1%
8	なるほど系	なるほど、なるほどね	6	1.8%
9	は系	はあ～	5	1.5%
10	ほんとう系	ほんとう、ほんとうに	3	0.9%
11	う系	うわ～	3	0.9%
12	です系	ですよ、ですね	2	0.6%
13	へ系	へえ?、へえ～	2	0.6%
14	わ系	わあ～	2	0.6%
15	ほ系	ほお	1	0.3%
16	や系	や～	1	0.3%
	合 計		333	100.0%

表 2.14 韓国語の「あいづち」の種類別頻度とその割合

出現順位	種類	形式	出現回数	割合(%)
1	はい系	はい、はい～、はいはい	195	58.9%
2	あ系	あ、あ～、ああ、あら、ありゃ	71	21.5%
3	うん系	うん、うん～	30	9.1%
4	お系	お～、おう～、おっ	17	5.1%
5	そう系	そうでしょう、そうですね、そうですよね、そうね	15	4.5%
6	は系	はああ、	1	0.3%
7	う系	うわ～	1	0.3%
8	いや系	いや～	1	0.3%
合計			331	100.0%

「あいづち」の種類の数を見ると、日本語は16種類、韓国語は8種類であり、日本語の方が韓国語より種類が多かった。「あいづち」の種類の中で一番出現頻度の割合が高かったのは、日韓共に「はい系」であった。特に、韓国語の「はい系」は「あいづち」全体の約6割を占めていた。日韓双方の出現頻度の高い「あいづち」には、「はい系」の他、「あ系」「うん系」「そう系」があった。以上の結果から、まず、日本語では韓国語よりも多様な種類の「あいづち」形式が出現することがわかる。また、日本語では韓国語では出現しなかった「そう系」の普通体も出現していた。さらに、各種類の「あいづち」全体に占める割合からみると、日本語は普通体の「あいづち」の出現頻度が高いのに対し、韓国語では丁寧体の「あいづち」の出現頻度が高いことが分かった。本研究の資料体が日韓ともにゲストを招いての

テレビインタビュー番組であることを考えるならば、この普通体と丁寧体の差は看過できないものである。また、韓国語で出現頻度の高かった「あいづち」の「はい系」が全体に占める割合は58.9% (195回) だったのに対し、日本語の同種類の出現頻度の割合が35.1% (117回) だったことを考えると、韓国語は日本語に比べて同じ種類の「あいづち」が頻繁に使われるということも分かる。

2.4.2. 出現環境における差異：「あいづち」の直前に出現する形式

本項では、出現頻度の割合が高かった「はい系」とその他の「あ系」と「うん系」がそれぞれどのような環境で出現するのかを、当該形式の直前に出現する形式を基に観察していく。表 2. 15および表 2. 16を参照されたい。

表 2. 15 日本語の「あいづち」形式の直前に出現する形式

順位	はい系	出現回数	割合(%)	あ系	出現回数	割合(%)	うん系	出現回数	割合(%)
1	ね	22	19.8%	ね	14	30.4%	ね	5	19.2%
2	て	11	9.9%	て	6	13.0%	けど	3	11.5%
3	けど	10	9.0%	し	3	6.5%	し	2	7.7%
4	です	10	9.0%	です	3	6.5%	で	2	7.7%
5	か	5	4.5%	な	2	4.3%	でしょう	2	7.7%
6	も	5	4.5%	う～ん	1	2.2%	あ～	1	3.8%
7	で	3	2.7%	え	1	2.2%	お	1	3.8%
8	でしょう	3	2.7%	が	1	2.2%	が	1	3.8%
9	ね	3	2.7%	形容詞	1	2.2%	から	1	3.8%
10	名詞	3	2.7%	けど	1	2.2%	く	1	3.8%
11	うん	2	1.8%	これ	1	2.2%	その	1	3.8%
12	が	2	1.8%	た	1	2.2%	て	1	3.8%
13	これ	2	1.8%	だ	1	2.2%	です	1	3.8%

日韓談話スタイルにおける「あいづち」の基礎的研究

14	た	2	1.8%	たい	1	2.2%	でも	1	3.8%
15	たり	2	1.8%	で	1	2.2%	なるほど	1	3.8%
16	と	2	1.8%	と	1	2.2%	名詞	1	3.8%
17	とか	2	1.8%	という	1	2.2%	よ	1	3.8%
18	は	2	1.8%	ので	1	2.2%			
19	ましょう	2	1.8%	ば	1	2.2%			
20	ます	2	1.8%	はい	1	2.2%			
21	あの	1	0.9%	名詞	1	2.2%			
22	え	1	0.9%	よ	1	2.2%			
23	お～	1	0.9%	る	1	2.2%			
24	く	1	0.9%						
25	ください	1	0.9%						
26	し	1	0.9%						
27	たら	1	0.9%						
28	という	1	0.9%						
29	か	1	0.9%						
30	の	1	0.9%						
31	ば	1	0.9%						
32	はい	1	0.9%						
33	ましょうか	1	0.9%						
34	ません	1	0.9%						
35	やっぱ	1	0.9%						
36	よ	1	0.9%						
	合計	111	100.0%	合計	46	100.0%	合計	26	100.0%

表 2.16 韓国語の「あいづち」形式の直前に出現する形式

順位	はい系	出現回数	割合(%)	あ系	出現回数	割合(%)	うん系	出現回数	割合(%)
1	て	26	14.4%	よ	7	12.1%	て	7	28%
2	が	24	13.3%	か	6	10.3%	ね	3	12%
3	よ	17	9.4%	た	6	10.3%	(形容詞)	2	8%
4	ね	13	7.2%	て	6	10.3%	が	2	8%
5	名詞	12	6.6%	です	5	8.6%	です	2	8%
6	か	10	5.5%	が	4	6.9%	あ～	1	4%
7	で	8	4.4%	に	4	6.9%	か	1	4%
8	です	7	3.9%	名詞	4	6.9%	から	1	4%
9	たら	6	3.3%	で	3	5.2%	で	1	4%
10	に	6	3.3%	でしょう	3	5.2%	でしょう	1	4%
11	はい	6	3.3%	と	2	3.4%	に	1	4%
12	だ	5	2.8%	ます	2	3.4%	はい	1	4%
13	た	4	2.2%	うん	1	1.7%	よ	1	4%
14	でしょう	4	2.2%	くれ	1	1.7%	名詞1	1	4%

15	ます	4	2.2%	形容詞	1	1.7%			
16	だから	3	1.7%	たら	1	1.7%			
17	よ	3	1.7%	ながら	1	1.7%			
18	を	3	1.7%	ね	1	1.7%			
19	あ	2	1.1%						
20	～ながら	2	1.1%						
21	から	2	1.1%						
22	とか	2	1.1%						
23	の	2	1.1%						
24	は	2	1.1%						
25	く	1	0.6%						
26	ください	1	0.6%						
27	くれ	1	0.6%						
28	と	1	0.6%						
29	まあ	1	0.6%						
30	(副詞)	1	0.6%						
31	まで	1	0.6%						
32	も	1	0.6%						
	合計	181	100.0%	合計	58	100.0%	合計	25	100.0%

日本語の「あいづち」の出現環境の第一の特徴は、「はい系」「あ系」「うん系」のすべての形式の直前に終助詞の「ね」が出現していたことである。また、「はい系」の「あいづち」形式は、接続助詞の「て」や終助詞の「けど」の後、「あ系」の「あいづち」形式は、接続助詞の「て」「し」の後、「うん系」の「あいづち」形式は、終助詞の「けど」、接続助詞の「し」の後に現れていた。この結果から、全体的に見て、当該三種類の「あいづち」形式は、その出現環境においてほとんど差がないとすることができる。

一方、韓国語の「あいづち」形式の出現環境の特徴は、「はい系」「うん系」の「あいづち」形式が共に接続助詞「て」の後によく現れたことである。また、「あ系」の「あいづち」形式も、もっとも出現頻度の高い終助詞の「よ」の割合が12.1%なのに対して、接続助詞「て」の割合は10.3%であるということから、全体的に見れば、どの種類の「あいづ

ち」形式も接続助詞「て」の後によく出現すると言いうことができる。なお、日本語の「はい系」の「あいづち」形式は接続助詞「けど」の後に出現することがあったが、韓国語ではそのようなことは確認されなかった。

3. 考察

3.1. 「あいづち」の「同意」機能の再検討

本稿は、「あいづち」の「同意」の機能の定義を「聞き手が話し手の言うことを聞いて理解し、さらにそれに同意するという信号を送る表現」とした。しかし、本稿のデータを注意深く観察してみると、「同意」の機能には「相手の発話内容に対する同意」の他に「相手の言表態度に対する同意」もあることが分かった。以下の例を参照されたい。

(4)

JM	では、次です。笑顔がステキ！怒ることはありますか？ ⁸⁸
JF	そうそう、そうそう ⁸⁹
JGM	う～ん、あまり最近怒らない(省略)

(日本語の資料6からの抜粋)

(5)

JM	
JF	殺人鬼の役だったんですね ⁶⁰
JGM	そうですね ⁶¹

(日本語の資料 2 からの抜粋)

(6)

KF	그때 활동하시던 모습을 좀 모아 봤거든요. 다 기억 나시죠? ²⁴ 강태기씨하고 또, ²⁵ (その時、活動なさったことをちょっと集めてみました。全部覚えていますよね?)
KM	예 ²³ (はい)
KGF	예 ²⁶ (はい、はい)

(韓国語の資料 7 からの抜粋)

(7)

KF	예 ⁴⁰ (はい)
KM	
KGF	이 작품을 시청자들은 아마 많이 기억하실거예요. ³⁹ (この作品を視聴者達は恐らく、たくさん覚えていると思います。)

(韓国語の資料7からの抜粋)

(4)のJFの「そうそう、そうそう」は、JMがJGMに対して発した「怒ることはありますか?」という「質問の言表態度」に対する「同意」である。これに対して、(5)の「そうですね」は、単にJFの「殺人鬼の役だったんですね」という確認の発話内容に対する「同意」を表す「あいづち」である。このような「あいづち」の「同意」機能における違いは韓国語にも見られた。(6)のKMの「예(はい)」は、KFの「다 기억 나시죠? (全部覚えていますよね?)」というKGFに対する確認のための質問という言表態度に対してKMが「同意」を表したものである。これに対して(7)のKF「예(はい)」は、単に、KGFの「기억하실거예요. (全部覚えていると思います)」という発話に対する「同意」を表している形式である。このように、3名以上の談話を対象としたときに初めて観察される話し手の言表態度にたいする「同意」は、従来の1名の話し手と1名の聞き手からなる単純な会話を対象とする研究では看過されてきたものであり、さらなる検討が必要だと思われる。

3.2. 「あいづち」と「発話権」の関係

先にも見たように従来の研究では、「あいづち」は「発話権」を持たないとするのが一般的であった。本研究もこの先行研究の見解に従い、観察にあたっては、取り合えず「発話権」を取らない形式を「あいづち」として扱った。しかし、先行研究の中には、金珍娥(2003a)のように、「あいづち」に「発話権」を認めるものもある。そこで、本項では「あいづち」と「発話権」の関係を改めて考察した。そのために本稿のデータの中でもっとも出現頻度の高かった「あいづち」形式の「はい系」「あ系」「うん系」を基に、「あいづち」と「発話権」の関係を見た。具体的には、当該形式が「発話権」を持たない純粹の「あいづち」として機能する場合と当該形式の後に何らかの実質的内容を持つ発話が続いた「発話権」を取った場合のそれぞれの出現環境を比較した。そのうち「発話権」を取った当該「あいづち」形式の出現環境は表3.1および表3.2のようになる。

表 3.1 日本語の発話権を取った「はい系」「あ系」「うん系」形式の直前に出現した形式

順位	はい系	出現回数	割合(%)	あ系	出現回数	割合(%)	うん系	出現回数	割合(%)
1	か	4/27	14.8%	ね	7/32	21.9%	か	2/13	15.4%

2	ね	4/27	14.8%	です	4/32	12.5%	ね	2/13	15.4%
3	名詞	4/27	14.8%	から	2/32	6.3%	あ	1/13	7.7%
4	る	3/27	11.1%	て	2/32	6.3%	そうそう	1/13	7.7%
5	けど	2/27	7.4%	ので	2/32	6.3%	たり	1/13	7.7%
6	から	1/27	3.7%	も	2/32	6.3%	て	1/13	7.7%
7	だ	1/27	3.7%	た	1/32	3.1%	で	1/13	7.7%
8	て	1/27	3.7%	うん	1/32	3.1%	です	1/13	7.7%
9	です	1/27	3.7%	か	1/32	3.1%	に	1/13	7.7%
10	に	1/27	3.7%	が	1/32	3.1%	はい	1/13	7.7%
11	の	1/27	3.7%	けど	1/32	3.1%	名詞	1/13	7.7%
12	はい	1/27	3.7%	たい	1/32	3.1%			
13	ましょう	1/27	3.7%	でしょう	1/32	3.1%			
14	ます	1/27	3.7%	なさい	1/32	3.1%			
15	もちろん	1/27	3.7%	はい	1/32	3.1%			
16				名詞	1/32	3.1%			
17				よ	1/32	3.1%			
18				る	1/32	3.1%			
19				を	1/32	3.1%			
合計		27			32			13	

表3. 2 韓国語の発話権を取った「はい系」「あ系」「うん系」の直前に出現した形式

順位	はい系	出現回数	割合 (%)	あ系	出現回数	割合 (%)	うん系	出現回数	割合 (%)
1	까(か)	9/29	31.0%	까(か)	6/30	20.0%	까(か)	2/12	16.7%
2	요(ね)	5/29	17.2%	요(ね)	6/30	20.0%	서(て)	2/12	16.7%
3	네, 예(はい)	4/29	13.8%	네(はい)	5/30	16.7%	고(と)	2/12	16.7%
4	니다(です)	3/29	10.3%	도(も)	2/30	6.7%	요(ね)	2/12	16.7%
5	고(で)	2/29	6.9%	니다(ます)	2/30	6.7%	저(あの)	1/12	8.3%
6	아(あ)	1/29	3.4%	니다(です)	2/30	6.7%	응, 음(うん)	1/12	8.3%
7	오(お)	1/29	3.4%	좀(ちょっと)	2/30	6.7%	가(が)	1/12	8.3%
8	그대로(そのまま)	1/29	3.4%	가(が)	1/30	3.3%	네(はい)	1/12	8.3%
9	서(て)	1/29	3.4%	名詞	1/30	3.3%			
10	쪄(よ)	1/29	3.4%	정말(ほんとう)	1/30	3.3%			
11	라(くれ)	1/29	3.4%	면서(ながら)	1/30	3.3%			
12				고(で)	1/30	3.3%			
合計		29			30			12	

日韓の「発話権」を取った「あいづち」形式に共通の特徴は、全体的に終助詞の「か」の後によく出現したことである。より詳しく見てみると、日本語の「はい系」「うん系」の形式は終助詞の「か」の後、「あ系」の形式は終助詞の「ね」

の後で一番よく出現したことが分かる。これに対して韓国語は、「はい系」「うん系」「あ系」すべての形式が終助詞「か」の後で出現する頻度が一番高かった。この結果から、日本語と韓国語の「発話権」を取った当該三形式の出現環境に

については、大きな差は見られなかったとすることができる。しかしながら、韓国語では、日本語ではほとんど見られなかった「はい」の後で当該三形式がよく出現したという事

実があることを見落としてはならない。このうち「発話権」を取った「はい」は、例(8)(9)(10)が示すように、相手の「あいづち」の「はい」の後によく現れていた。

(8)

KF	▲ <small>안녕하세요</small> ◎ (あ～はい)	▲아니, ¹²¹ 어쩔 저렇게 (省略) (いや、あらまあ、あのよう)
KM	지우가 나오네? ¹¹⁸ ◎ (ジウが出るね?)	▲ <small>맞아요</small> ¹¹⁸ 맞아요, 맞아요. ¹¹⁹ 많이 답았어요. ¹²⁰ ◎ (はい、そうですね、そうですね、よく似ってます)
KGF		

(韓国語の資料3からの抜粋)

(9)

KF	▲ <small>네</small> ◎ (はい)	
KM		
KGM	▲우리나라 최고의 대학 ¹²⁸ ◎ (私たちの国の中で、一番の大学)	▲ <small>예</small> ¹²⁸ 근데 벌써 20년 전 일이고, 뭐 옛날 일이고 그리고 지금 저한테는 (省略) (はい、ところで、もう20年も前のことで、まあ、昔のことで、それから、今、私には)

(韓国語の資料4からの抜粋)

(10)

KF	▲지금은 안 입으시지만 ⁶⁶ ◆ (今は着ないでしょうけど)	▲ <small>예</small> ⁶⁸ 근데, 귀도.. 죄송하지만 여러겔 뚫으셨네요? ⁶⁹ ◇ (はい、ところで、耳も…申し訳ないですが、色んなところに穴を開けましたね)
KM		
KGM	▲ <small>네</small> ◎ (はい)	▲ <small>네</small> ⁷⁰ ◎ (はい)

(日本語の資料6からの抜粋)

次に、「発話権」を取らない「はい系」「あ系」「うん系」の形式と「発話権」を取った「はい系」「あ系」「うん系」の形式の出現環境を比較してみる。

まず、「発話権」を取らない三形式については、2. 4. 2. で見たように、日本語は「ね」の後(表2. 15参照)、韓国語は「て」の後によく出現していた(表2. 16参照)。これに対して、「発話権」を取った三形式は日韓ともに、全体的に終助詞「か」の後によく現れた。疑問を示す終助詞「か」の後に「発話権」を取る「あいづち」形式が出現するという事は、それが質問に対する回答の前に置かれた、先行研究で言う「受け」⁸や「フィラー」的な機能を果たしているからだと考えられる。

また、日韓両言語の「発話権」を取らない当該三形式は接続助詞「て」「けど」「し」の後によく現れるが、「発話権」

を取った当該三形式がこれらの接続助詞に後続することは非常に少なかった。このような出現環境の違いからみると、形式的には同一であっても、これらの形式はそれぞれ異なる機能を持っているのではないかと推察される。以上の結果から、本研究は、金珍娥(2003a)が主張するように、「発話権」を取るものも取らないものも同じように「あいづち」と見なす考え方には問題があると考えられる。

4. まとめ

以上の観察および考察の結果から明らかになった「あいづち」に関する日韓の相違点は、次のようにまとめられる。

- ① 日韓の「あいづち」は、その総数においては大きな差は見られなかったが、男女において差が見られた。す

8 Cf. 因・上垣(1997)

なわち、全体的に日本人は男性より女性が「あいづち」を多く打つのに対して、韓国人は、逆に、女性より男性が「あいづち」を多く打っていた。

- ② 韓国人男性の資料から、韓国語の会話では、話題が自分にとって身近なものときには、「あいづち」ではなく、turn を取ることのできる諸形式を用い会話に積極的に参加すると思われる。
- ③ 司会者のゲストに対する年代別「あいづち」頻度については、日本人司会者は自分より年上の年代に対して「あいづち」をより多く打つのに対し、韓国人司会者は、日本人司会者とは逆に、自分より若い年代に対してより多くの「あいづち」を打っていた。
- ④ 相手の職種と「あいづち」の相関については、韓国語番組のデータしか取ることができなかった。それによれば、韓国人司会者はゲストが非芸能人のときよりも自分と同じ芸能人のときにより頻繁に「あいづち」を打っていた。この現象には、相手との親疎が関係していると思われる。
- ⑤ 「あいづち」の「形式的観点」からの日韓の差異については、日韓両方とも「語彙的な対立項を持つあいづち」の出現頻度が一番高く、「あいづち」の種類においては、「はい系」が一番頻繁に出現した。
- ⑥ 「出現環境」という観点からの日韓の差異については、日本語は「はい系」「あ系」「うん系」のすべてが終助詞「ね」の後にもっとも頻繁に出現し、韓国語では「て」の後によく出現する傾向が確認された。また、
- ⑦ 「発話権」を取らない「はい系」「あ系」「うん系」の形式と「発話権」を取った「はい系」「あ系」「うん系」の形式の出現環境を比較してみると、前者は、日本語では終助詞「ね」の後に、韓国語では「て」の後に頻繁に出現したが、後者は日韓ともに、終助詞「か」の後に頻出した。このような出現環境の違いから、同じ形式でも、「発話権」を取らない形式と「発話権」を取る形式とでは、機能が異なると考えられる。

参考文献

- 今石幸子 (1992)「談話における聞き手の行動—あいづちのタイミングについて—」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』, 147-151.
- 金 秀芝 (1992)「日韓両言語におけるあいづちの対照研究—電話の会話を中心に—」『日本語学』第15巻第1号, 85-90.
- 金 珍娥 (2002)「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』第

183輯, 51-91, 天理: 朝鮮学会

- ………… (2003a)「韓国語と日本語の turn の展開から見たあいづち発話」『朝鮮学報』第191輯, 1-28, 天理: 朝鮮学会
- ………… (2003b)「韓国語と日本語における談話構造—“turn-taking システム”から“turn-exchanging システムへ”—」『朝鮮学報』第187輯, 1-28, 天理: 朝鮮学会
- ………… (2003c)「韓国語と日本語の文、発話単位、turn-談話分析のための文字化システムによせて—」『朝鮮語研究2』, 83-109, 東京: くろしお出版
- 黒崎良昭 (1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫 県滝野方言について—」『国語学』150, 122-109.
- 小宮千鶴子 (1986)「あいづち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号, 43-62, 大東文化大学語学教育研究所
- ザドラウスキー、ポリ (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』東京: くろしお出版
- 杉戸清樹 (1988)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現—」『日本語教育』67号, 48-59.
- 杉藤美代子 (1987)「ポーズとイントネーション」『国立国語研究所報92 談話行動の諸相—座談資料の分析—』, 107-138, 東京: 三省堂
- 因 京子・上垣康与 (1997)「接触場面の対話における発話型—「受け答えのよさ」とは何か: 伝達能力記述の試み—」『比較社会文化』第3巻, 89-99.
- 任栄哲・李先敏 (1995)「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5号, 239-251. 国際交流基金日本語国際センター
- 任炫樹 (2001)「日韓断り談話における初出あいづちマーカー」『日本語・日本文化論集』37-64. (名古屋大学留学生センター)
- 堀口純子 (1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号, 28-25.
- ………… (1997)『日本語教育と会話分析』東京: くろしお出版
- 松田陽子 (1988)「対話の日本語教育—あいづちに関連して」『日本語学』第7巻, 第13号, 7-13.
- 水谷信子 (1984)「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古稀記念論文集第二巻 言語学編』, 261-279, 東京: 三省堂
- ………… (1988)「あいづち論」『日本語学』第7巻, 第12号, 4-11.
- ………… (1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』4号, 4-10.

メイナード、K.泉子(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』第16巻,第11号,88-92.

…………… (1992)『会話分析』東京:くろしお出版

李善雅 (2001)「議論の場におけるあいづち: 日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『世界の日本語教育』11号,139-152, 国際交流基金日本語国際センター

A Basic Study on the Backchannels in Japanese and Korean Conversations

Yukyung CHOI

This paper aims to investigate the similarities and difference between the Japanese backchannel and the Korean backchannel based on data of the interview programs which consist of one host, one hostess and one guest. The results are as follows: ① With respect to frequency, both in Japanese and in Korean, the forms belonging to the Yes-system appear most frequently. ② With respect to context where the backchannels in question appear, in Japanese the forms belonging to the Yes-system, A-system and Un-system appear after the final *Ne* particle, while in Korean most of the forms appear after *So*. ③ The difference between the forms of the Yes-system, the A-system and the Un-system which take “the floor” and the same forms which do not take “the floor are as follows” in Japanese, the forms which take “the floor” appear frequently after the final particle *Ne*, while in Korean the forms which take “the floor” appear after *So*. With regard to the forms which do not take “the floor”, both in Japanese and in Korean, they appear frequently after the interrogative particle *Ka*. This suggests that the same forms function differently depending on the whether the floor is present or not.